コミュニケーションを志向した英語授業への改善方法

-ＣＯＬＴを利用した授業分析の手法を用いて-

志村　昭暢　（旭川実業高等学校）

Abstract

In the New Course of Study in English Education (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, 2008), to develop communicative competence is one of the most important goals in Japanese junior and senior high school English educations. It is for this reason that future teachers must acquire the skills to teach communicative English lessons. However, the consensus of communication-oriented lessons has not been discussed enough by teachers, so each teacher has a different view of communicative lessons based on their own experiences. Frölich, Spada and Allen (1985) developed the COLT (Communicative Orientation of Language Teaching) observation scheme to analyze communicative orientation in language classrooms and cross-interaction between teachers and students. This paper examines how communication oriented lessons are conducted in four different demonstration lessons which are taught by student teachers and analyzed by COLT. The result shows that each lesson has different characteristics in view of communicative orientations. This paper also proposes the improvements to these lessons in how to become more effective.

1．はじめに

2009年に文部科学省から発表された，高等学校の新学習指導要領（文部科学省，2008）において，コミュニケーション能力の育成が英語教育における重要な目標として現在の学習指導要領に引き続き掲げられている。それに伴い，これからの英語教師において，これまでにも増してコミュニケーションを志向した授業を行うことが求められる。しかし，教師の間でどのような授業がコミュニケーションを志向しているか，十分な議論がなされていない。

Frölich, Spada and Allen (1985) で開発された授業分析手法である，Communicative Orientation of Language Teaching Observation Scheme (COLT) はCommunicative Language Teachingや第二言語習得研究の理論を基に考案されたコミュニケーション志向を測定する手法で，英語授業をこの手法を用いて分析することにより，授業がどの程度コミュニケーションを志向したものかを客観的に示すことができる。

本研究では，教師を目指している教員養成課程の大学生４名が行った中学校での授業を想定した模擬授業について，COLTを用いて分析し，それぞれの授業における特徴とコミュニケーション志向を分析し，それぞれの授業における改善点を指摘し，授業改善に役立てる方法を提案することとし，以下の２つの研究課題を設定した。

1）COLTによる分析により，授業のコミュニケーション志向の違いをどのように明らかにするのか。
2）COLTによる分析により，授業者に対して，どのような授業改善の方法を提案できるのだろうか。

研究課題１に対しては，COLTによる分析を行い，４名の授業者による結果について，どのような点がコミュニケーションを志向しているのかを検証し，研究課題２においてはその結果を踏まえ，どの点においてコミュニケーション志向が低く，改善が必要かを考察していく。

2．先行研究

COLTは教室内における言語活動と指導過程の観察・記録を行うPart A

と，教師と学習者または学習者同士の発話をカテゴライズする Part B の 2 種類の分析方法が目的に応じて使い分けられている。米山・大湊・須田・前野・吉田(2003) によると， COLT Part A は Communicative Language Teaching に関する教育学的問題に由来するカテゴリーを中心に構成されており，教師と学習者によって行われた活動ごとに教室での指導を時間によって記述し，どの程度コミュニケーションの傾向があるかを測定する手法である。授業分析の手法の多くが授業のトランスクリプトの作成が必要であるのに対し，COLT Part A はその必要がなく，リアルタイムでの分析が可能であることが指摘されている（石塚・横山・平田・青木・伊藤他, 2005; 米山他, 2003; Spada and Frölich,1995)。また，特にコミュニケーション志向を表す５つのカテゴリーを示し，それぞれの割合に基づいて点数を算出し，その合計点を Global Scouring として算出することができる。Frölich et al. (1985) ではこの手法を用いてカナダの French immersion（フランス語でほぼすべての教科の授業を行う）クラスと Extended French（選択フランス語）クラス，ESL（第二言語としての英語）クラス，Core French（必修フランス語）クラスの授業におけるコミュニケーション志向を比較したところ，French immersion の Global Score が 12 pt と最も高く，Extended French が 9pt, ESL が 8pt, Core French が 6 pt と最も低い結果であったと指摘している。

COLT Part B について，米山他 (2003)では第一言語習得，第二言語習得研究の問題を反映しているカテゴリーで構成されており，活動内に発生した言語的なやり取りを記述したものとしている。河合・酒井・横山・石塚・青木(2007) ではトランスクリプトの作成が必要で，コーディングや集計方法の理解に困難が伴うと指摘しているが，青木・石塚・横山・酒井・河合(2008) では，より詳しい授業の特徴を明らかにすることが可能であるとしている。

COLT を用いた研究は，石塚他 (2005) において，日本の大学における英語を母語とする教師が担当している４つのコミュニケーション授業を COLT Part A で分析し，授業の目標が同じであっても担当者の違いによって特徴が異なることを指摘し，青木他 (2008) は上記の授業を COLT Part B で分析し，教師間の授業方法の違いと授業目標への反映状況を明らかにしている。米山他 (2003) は COLT Part A と COLT Part B 両方の手法を用いて２名の

教師が行った中学校での授業を分析したところ，どちらの授業も高いコミュニケーション志向を示す特徴が見られたが，その特徴は多くの点で異なっていた。

３．研究方法

３．１．分析対象と分析方法

本研究では，北海道にある教員養成系大学の英語教育を専攻している学生が自主ゼミで行った18の模擬授業の中から，比較的参観者の評価が高かった4名の学生が行った授業を抽出し，それぞれClass A，B，C，Dと名づけて分析した。授業者の学年はClass AとBが3年生男子，Class Cが2年生女子，Class Dが1年生女子である。授業の指導案はゼミ担当教員と現役教員の大学院生が事前に指導を行い，学習者のコミュニケーション能力育成を目的とした授業を行うように指示している。生徒役は授業を行っていない17名の学生が行った。使用テキストはNEW HORIZON English Course 1 (笠島・浅野・下村・牧野・池田他, 2007) で，Unit4からUnit5をそれぞれ担当した。

授業のすべてをビデオカメラとＩＣレコーダで記録し，ターン毎にトランスクリプトを作成し，トランスクリプトとビデオを参照しながら，COLT Part Aによるコーディングを行った。その後，Global Scoreを算出した。次にトランスクリプトを参照し，COLT Part B によるコーディングを行い，それぞれの授業におけるコミュニケーション志向と授業の特性を分析した。

３．２．COLTのカテゴリー

COLTの各カテゴリーはFrölich et al. (1985) で開発され，Spada and Frölich (1995) で一部が改訂されている。本研究ではSpada and Frölich (1995) のカテゴリーを採用した。

COLT Part Aのチェックリストには，活動の時間（Time），活動とエピソード（Activities &Episode）の番号を入れる部分，5種類のカテゴリーと各カテゴリー内の項目があり，それぞれの活動における配当時間について，各カテゴリー内でパーセンテージを算出する。また，同じカテゴリー内で2つ以上の項目がある場合，多くの時間が当てられているものをPrimary focusとし，

その項目名を最初に記述する。さらに，２つ以上の項目が同じぐらい扱われているものをEqual focusとしてカテゴライズする。COLT Part Aの各カテゴリーと項目は以下の通りとなっている

Ⅰ．活動形態　(Participant Organization)

A. クラス (Class)　(1)教師⇔学習者／クラス (T⇔S/C)，(2)学習者⇔学習者／クラス (S⇔S/C)，(3)　一斉活動 (Choral)

B. グループ (Group)　(1)タスクが同じ (Same task)，(2)タスクが異なる (Different task)

C. 個人 (Individual)　(1)タスクが同じ (Same task)，(2)タスクが異なる (Different task)

Ⅱ．活動内容 (Content)

A. 授業運営 (Management)　(1)手順の説明 (Procedure)　(2)学習者に対しての指導 (Discipline)

B. 言語 (Language)　(1) 形式 (Form)，Formの要素として，語彙 (vocabulary)，発音 (pronunciation)，文法 (grammar)，スペリング (spelling)分ける。(2)機能 (Function)，(3) 談話 (Discourse)，　(4)社会言語学的要素 (Sociolinguistics)

C. その他のトピック (Other topics)　(1)身近な話題 (Narrow)，(2)広範囲の話題 (Broad)

Ⅲ．活動内容の制限 (Content Control)

(1)教師・テキスト(Teacher / Text), (2)教師・テキストまたは学習者(Teacher / Text / Student)，(3)学習者 (Student)

Ⅳ．学習者の使用技能(Student Modality)　A. リスニング (Listening)，B. スピーキング (Speaking)，C. リーディング (Reading)，D. ライティング(Writhing)，E. その他(Other)

Ⅴ．教材 (Material)

A. 教材の種類 (Type)

(1)文字教材 (Text)　a. 文や句が短いもの (Minimal)　b. 物語や文章など長いもの (Extended)

(2)聴覚教材 (Audio) (3)視覚教材 (Visual)

B. 教材の出典・目的 (Source) (1) 第二言語母語話者用 (L2-NNS), (2) 母語話者用を第二言語教育用に作り変えたもの (L2-NSA), (3) 母語話者用 (L2-NS)

COLT Part A の Global Scoring はコミュニケーション志向を数値化し，25 点満点で評価する方法で，その算出方法はコミュニケーション志向を表す項目である５つの項目について点数があたえられる。項目は, a. グループ活動, b. 授業運営またはその他のトピック，c. 教師と生徒もしくは生徒のみによる活動内容の制限，d. 物語や文章など長いテキストの使用，e. 半母語話者用を第二言語教育用に作り変えたものや母語話者用教材の使用である。a～e それぞれの項目における配当時間によって点数が与えられ, 配点は 0 ～19% なら 1 点，20～39% なら 2 点，40～59%なら 3 点，60～79%なら 4 点，80～100% なら 5 点とし，その合計点が Global Score となる。COLT Part A のカテゴリーおよび Global Scoring の詳しい方法については石塚他 (2005) で詳しく説明されている。

COLT Part B のカテゴリーは以下の８つのカテゴリーで構成されており，COLT Part A 同様に，それぞれのカテゴリー内に項目がある。それぞれのカテゴリー内で発話量（ターン毎）とその割合を算出する。また，教師と学習者の発話について別々に結果をまとめる必要がある。COLT Part B のカテゴリーと詳細項目は以下の通りである。

Ⅰ. 非授業活動 (Off task)

Ⅱ. 使用言語 (Use of target language), 母語(L1) ／第２言語(L2)

Ⅲ. 情報格差 (Information gap) a.情報提供 (Giving information) (1)予想可能情報 (Predictable) (2)予想不可能情報 (Unpredictable) b. 情報要求 (Requesting information) (1)擬似要求 (Pseudo request) (2)真正要求 (Genuine request)

Ⅳ. 発話量 (Sustained speech) a. 1,2 語 (Ultra minimal) ：学習者のみ b. 3 語以上の句，節，文 (Minimal) c. ３以上の節 (Sustained)

V．形式／内容への応答 (Reaction to form or message)

VI. 学習者／教師の発話摂取 (Incorporation of student / teacher utterances) a. 訂正 (Correction) b. 反復 (Repetition) c. 換言 (Paraphrase) d. 論評 (Comment) e. 拡張 (Expansion) f. 明確化要求 (Clarification request) g.精緻化要求 (Elaboration request)

COLT Part B のカテゴリーは，河合他 (2007) で詳しく説明されている。

3．3．COLT の結果とコミュニケーション志向

杉田 (2002) は Frölich et al. (1985) による授業観察によって明らかにされたコミュニケーション志向の高さについて，Global Scoring とは別に以下の様にまとめている。コミュニケーション志向が高い活動としては，教師と学習者，学習者同士のインタラクションが多い，意味を中心とした活動が多いい，学習者中心の話題制御が多い，教師の意味内容を重視した質問が多い，教師の発話が長い，学習者発言への対応を詳細に説明させる，学習者の応答内容が非明示的，学習者の発話が長い，学習者の使用する言語形式が制限されない，目標言語の使用 が多い（杉田,2002:82)。本研究では授業のコミュニケーション志向を判断する方法として採用し，授業改善の際の指針とする。

4．結果

4．1．Class A の授業分析

表1は COLT Part A における focus の分布の Participant Organization と Content に関する部分の集計である。Participant Organization は T⇔S/C が 69.4%と最も多かった。これは，教師が中心となり，学習者とのインタラクションを多く行っていることになり，杉田 (2002) ではコミュニケーション志向が高いとしているが，石塚他 (2005) ではこの項目が多い授業を教師主導型の特徴であるとしている。コミュニケーション志向が高いとされている Group 活動は観測されなかった。Content に関しては，Form + Procedure が 76.5%と最も高く，コミュニケーション志向があまり高くないと考えられる。Narrow + Procedure は 16.5%とそれほど高くなく，意味内容よりも言語形式に関する事柄が多く取り上げられていることを示している。

Procedure についてはすべての項目において使用されているが，そのほとんどが日本語で行われていた。Global Scoring では，この項目が高いとコミュニケーション志向が高く算出されるが，英語で行われることが前提であり，ほぼ日本語で行われている授業に関しては該当しないのではないか。

表1　Class A における focus の分布：Participant Organization, Content

	Participant Organization			Content		
Exclusive focus	T⇔S/C	1687 (	69.4%)	–	–	
Primary focus	Choral+T⇔S/C	687 (	28.3%)	Procedure+Narrow	101 (	4.5%)
	S⇔S/C+T⇔S/C	56 (	2.3%)	Narrow+Form+Procedure	54 (	2.4%)
				Form+Procedure	1701 (	76.5%)
				Narrow+ Procedure	367 (	16.5%)
Equal focus	–	–		–	–	

表2は COLT Part A における focus の分布の Content Control, Student Modality, Materials に関する部分の集計である。Content Control はすべて Teacher/Text であり，教師によってすべてコントロールされており，教師主導型の特徴を示している。そのため，あまりコミュニケーションを志向しているとはいえないのではないか。Student Modality に関しては Listening + Speaking が最も高く，88.8％であった。Materials はすべて L2-NNS (Minimal) を使用しており，教科書の単語と本文を利用していたが，中学校1年生用の教材であり，本文の内容が短い対話文で構成されているため Minimal しか観測されなかった。

表2　Class A における focus の分布：Content Control, Student Modality, Materials

	Content Control			Student Modality			Materials		
Exclusive focus	Teacher/Text	2460 (	100.0%)	Listening	120 (	9.6%)	L2-NNS(Minimal)	2203 (	100.0%)
				Speaking	20 (	1.6%)			
Primary focus	–	–		Listening+Speaking	1111 (	88.8%)	–	–	
Equal focus	–	–		Listening+Speaking			–	–	

表3は COLT Part B における教師の発話の Off task, Target language, Information Gap and Sustained Speech に関する部分の集計である。この教

師の発話はL1が55.5%と日本語での発話がL2を上回っており，L2使用に関してはMinimalが74.4%であり，1回の発話が短い傾向にある。そのため，コミュニケーション志向が低いと考えられる。Giving info.に関してはUnpredict.がほとんどであり，その内容は言語形式や意味内容の説明である。Request info.に関しては，Pseudo requ.が84.8%と高く，コミュニケーション志向が低い傾向にあると考えられる。Global scoreの数値は6点で，Frölich et al. (1985) のCore Frenchの授業と同じ値であり，コミュニケーション志向がそれほど高くないことを示している。

表3 Class Aにおける教師の発話:
Off task, Target language, Information Gap and Sustained Speech

	Target language		Information gap: Giving info.		Information gap: Request info.		Sustained speech	
Off task	L1	L2	Predict.	Unpredict.	Pseudo requ.	Genuine requ.	Minimal	Sustained
0	233 (55.5%)	187 (44.5%)	1 (0.6%)	153 (99.4%)	173 (84.8%)	31 (15.2%)	32 (74.4%)	11 (25.6%)

表4はCOLT Part B における学習者の発話のOff task, Target language, Information Gap and Sustained Speechに関する部分の集計である。学習者の発話はL2が93.5%と非常に高いが，その大部分が教科書の音読であり，コミュニケーションを志向していると判断すべきか検討が必要である。

表4 Class Aにおける学習者の発話:
Discourse Initiation, Target language, Information Gap, Sustained Speech and Form restriction

	Target language		Information gap: Giving info.		Information gap: Request info.	
Discourse Initiation	L1	L2	Predict.	Unpredict.	Pseudo requ.	Genuine requ.
0	16 (6.5%)	231 (93.5%)	221 (90.6%)	23 (9.4%)	1 (33.3%)	2 (66.7%)

Sustained speech			Form restriction		
Ultra-minimal	Minimal	Sustained	Choral	Restricted	Un-restricted
72 (29.3%)	174 (70.7%)	0 (0.0%)	224 (91.8%)	2 (0.8%)	18 (7.4%)

また，発話の長さはMinimalが70.7%，Ultra-minimalが29.3%と短い発話がすべてを占めている。これはテキストの英文が短いことと，中学校1

年生を対象とした授業のため，長い発話を学習者に求めるのが難しいと判断したためと考えることもできる。Giving info.に関しては，Predict.が 90.6%と高く，教師の Pseudo requ.に対する回答と教師の指示による音読（Repeat after me）が多くを占めていた。Request info.は発話量自体が少なく，学習者からの自発的な質問等が非常に少なかった。Form restriction は学習者の発話における音読の割合が高いため，Choral が 91.8%と高く，Unrestricted は 7.4%と低い傾向にあった。

表 5 は COLT Part B における教師・学習者の Incorporation of Student/Teacher Utterances に関する部分の集計である。教師の発話において，意味に関する発話のみ観測された。内容は Repetition + Comment (64.5%) と Repetition (35.5%) だけであった。Repetition は学習者の発話に対する相槌の役目を果たしており，学習者の発話を促進する作用があると考えられるが，発話内容を深めるような発話に関しては観測されなかった。学習者の発話取り込みは観測されなかった。

表 5　Class A における教師／学習者の発話

Teacher Verbal Interaction Incorporation of Student Utterances			Student Verbal Interaction Incorporation of Student/Teacher Utterances		
Form-related incorporations	0	(0.0%)	Form-related incorporations	0	(0.0%)
Message-related incorporations	31	(100.0%)	Message-related incorporations	0	(0.0%)
Repetition	11	(35.5%)			
Repetition+Comment	20	(64.5%)			

4．2．Class Bの授業分析

表 6 は COLT Part A における focus の分布の Participant Organization と Content に関する部分の集計である。Participant Organization は T⇔S/C が 69.1%と最も多かった。この授業でも Group に関する項目は観測されなかった。Content に関しては，言語形式が中心の Form + Procedure が 56.0%と最も高く，意味内容中心の Narrow+ Procedure は 28.7%とそれほど高くなく，コミュニケーション志向が低い傾向にある。Procedure については Class A 同様にすべての項目において使用されているが，この授業でも日本語で行われていた。

表6　Class B における focus の分布：Participant Organization, Content

	Participant Organization			Content		
Exclusive focus	T⇔S/C	1876 (	69.1%)	–	–	
Primary focus	Choral+T⇔S/C	234 (	8.6%)	Procedure+Form	144 (	5.9%)
	S⇔S/C+T⇔S/C	606 (	22.3%)	Form+Procedure	1358 (	56.0%)
				Procedure+Narrow	228 (	9.4%)
				Narrow+ Procedure	697 (	28.7%)
Equal focus	–	–		–	–	

表7はCOLT Part A における focus の分布の Content Control, Student Modality, Materials に関する部分の集計である。Content Control はこの授業もすべて Teacher/Text であり，強い教師主導型の特徴を示しており，コミュニケーション志向が低い傾向にある。Student Modality に関しては Listening + Speaking が最も高く，78.3%であった。また，Writing が 14.3% 見られた。Materials はすべて L2-NNS (Minimal) が 80.3%で，教科書の単語と本文を利用していた。また，Visual も 56.3%使用しており，これは単語のピクチャーカードや実物教材，黒板などを多数利用して授業を展開していたことから観測されたものと考えられる。Global score の数値は Class A と同じ 6 点で，Frölich et al. (1985) の Core French の授業と同じ値であり，コミュニケーション志向がそれほど高くないことを示している。

表7　Class B における focus の分布：Content Control, Student Modality, Materials

	Content Control			Student Modality			Materials		
Exclusive focus	Teacher/Text	3043	(100.0%)	Writing	313 (	14.3%)	L2-NNS(Minimal)	388	(43.7%)
							Visual	499	(56.3%)
Primary focus	–	–		Listening+Speaking	1709 (	78.3%)	–	–	
				Speaking+Listening	38 (	1.7%)			
Equal focus	–	–		Listening+Speaking	124 (	5.7%)	–	–	

表8はCOLT Part B における教師の発話の Off task, Target language, Information Gap and Sustained Speech に関する部分の集計である。この教師の発話は L1 が 41.2%と英語での発話が日本語での発話を上回っている。L2 使用に関しては Minimal が 89.5%であり，1 回の発話が短い傾向にあり，コミュニケーション志向が低いと考えられる。Request info.に関しては，

Pseudo requ.が 85.9%と高く，この授業もコミュニケーション志向が低い傾向にあると考えられる。

表 8 Class B の授業における教師の発話:
Off task, Target language, Information Gap and Sustained Speech

	Target language		Information gap				Sustained speech	
			Giving info.		Request info.			
Off task	L1	L2	Predict.	Unpredict.	Pseudo requ.	Genuine requ.	Minimal	Sustained
0	159 (41.2%)	227 (58.8%)	4 (3.3%)	116 (96.7%)	201 (85.9%)	33 (14.1%)	316 (89.5%)	37 (10.5%)

表 9 は COLT Part B における学習者の発話の Off task, Target language, Information Gap and Sustained Speech に関する部分の集計である。

表 9 Class B における学習者の発話:
Discourse Initiation, Target language, Information Gap, Sustained Speech and Form restriction

	Target language		Information gap			
			Giving info.		Request info.	
Discourse Initiation	L1	L2	Predict.	Unpredict.	Pseudo requ.	Genuine requ.
0	32 (8.6%)	338 (91.4%)	273 (79.8%)	69 (20.2%)	0 (0.0%)	28 (100.0%)

Sustained speech			Form restriction		
Ultra-minimal	Minimal	Sustained	Choral	Restricted	Un-restricted
76 (20.5%)	294 (79.5%)	0 (0.0%)	272 (73.9%)	87 (23.6%)	9 (2.4%)

学習者の発話は L2 が 91.4%と非常に高いが，その大部分が教科書の音読と単語の音読であった。また，発話の長さは Minimal が 79.5%，Ultra-minimal が 20.5%と短い発話が多く，コミュニケーション志向が低いと考えられる。Giving info.に関しては，Predict.が 79.8%と高く，教師の Pseudo requ.に対する回答と教師の指示による音読 が多くを占めていたが，Unpredict.も 20.2%観測された。Request info.は Genuine requ.がすべてを占めており，28 ターン観測された。Form restriction はこの授業においても学習者の発話における音読の割合が高いため，Choral が 73.9%と高く，Unrestricted は 2.4%と低い傾向にあった。

表 10 は COLT Part B における教師・学習者の Incorporation of

Student/Teacher Utterances に関する部分の集計である。教師の発話において，Form に関する発話の取り込みが 32.3%あり，内容は Form に関するもので Comment (19.4%) が高かった。Message に関する発話の取り込みは 67.7%であり，Repet. + Comment が 29.0%と Comment が 22.6%と比較的高い傾向にあった。また，Clarification request が 1 ターン観測され，学習者の発話内容を深める取り込みを行っている。学習者による発話取り込みは観測されなかった。

表 10　Class B における教師／学習者の発話

Teacher Verbal Interaction Incorporation of Student Utterances		Student Verbal Interaction Incorporation of Student/Teacher Utterances	
Form-related incorporations	10 (32.3%)	Form-related incorporations	0 (0.0%)
Correction	1 (3.2%)		
Comment	6 (19.4%)		
Clarification request	1 (3.2%)		
Repet+comment	1 (3.2%)		
Correction+ Comment	1 (3.2%)		
Message-related incorporations	21 (67.7%)	Message-related incorporations	0 (0.0%)
Repetition	5 (16.1%)		
Comment	7 (22.6%)		
Repet+comment	9 (29.0%)		

4．3．Class C の授業分析

表 11 は COLT Part A における focus の分布の Participant Organization, と Content に関する部分の集計である。この授業は授業の大半で英語が使用されており，コミュニケーション志向した授業である。Participant Organization は T⇔S/C が 54.8%と最も多く，教師が中心となった学習者とのインタラクションが多いことを示している。この授業は，Choral + T⇔S/C が 37.1%と他の 3 つの授業に比べ，多い傾向にあった。この授業でもコミュニケーション志向が高いとされている Group に関する項目は観測されなかった。Content に関しては，言語形式が中心の Form + Procedure が 65.8%と最も高く，意味内容中心の Narrow + Procedure は 30.8%とそれほど高くなく，コミュニケーション志向が低い傾向にある。しかし，この授業は Procedure の大半が英語で行われており，コミュニケーション志向が高い傾向にある。

表 11　Class C における focus の分布：Participant Organization, Content

	Participant Organization			Content		
Exclusive focus	T⇔S/C	1419 (	54.8%)	–	–	
Primary focus	Choral+T⇔S/C	960 (	37.1%)	Procedure+Narrow	76 (	3.3%)
	S⇔S/C+T⇔S/C	209 (	8.1%)	Form+Procedure	1511 (	65.8%)
				Narrow+ Procedure	708 (	30.8%)
Equal focus	–	–		–	–	

表 12 は COLT Part A における focus の分布の Content Control, Student Modality, Materials に関する部分の集計である。Content Control は Teacher/Text が 77.2% であり，教師主導型の特徴を示しているが，Teacher/Text/Stud. も 22.8% 見られた。Student Modality に関しては Listening + Speaking が最も高く，53.5% であり，Equal focus でも 21.3% であり，かなり Listening と Speaking に焦点が当てられた授業である。Reading に関しては観測されず，この授業でも教科書の内容についてはあまり触れられていなかった。

表 12　Class C における focus の分布：Content Control, Student Modality, Materials

	Content Control			Student Modality			Materials		
Exclusive focus	Teacher/Text	2173 (	77.2%)	Listening	69 (	2.6%)	L2-NNS(Minimal)	1749 (	80.3%)
	Teacher/Text/S	641 (	22.8%)				Visual	430 (	19.7%)
Primary focus	–	–		Listening+Speaking	1413 (	53.5%)	–	–	
				Speaking+Listening	245 (	9.3%)			
				Writing+Listening	353 (	13.4%)			
Equal focus	–	–		Listening+Speaking	562 (	21.3%)	–	–	

Materials は L2-NNS (Minimal) が 80.3% で，教科書の単語と本文を利用していた。また，Visual も 19.7% 使用しており，これは単語のピクチャーカードを多数利用して授業を展開していたことから観測されたものと考えられる。

Global score の数値は 7 点で，Class A・B よりも高い値を示している。また，Frölich et al. (1985) の Core French（必修フランス語）の授業よりも高く，ESL 授業の 9 点よりも低い値であり，Class A・B よりもコミュニケーション志向が高いことを示している。

表 13 は COLT Part B における教師の発話の Off task, Target language, Information Gap and Sustained Speech に関する部分の集計である。この教師の発話は L2 使用率が 83.5%と 3 つの授業の中で最も多い割合を示しており，コミュニケーション志向が高いといえる。L2 使用に関しては Minimal が 93.5%であり，1 回の発話が短い傾向にあり，英語使用量が多い割にはコミュニケーション志向が低いと考えられる。Giving info.に関しては Unpredict.が 89.8%ほとんどであり，その内容は言語形式や意味内容の説明である。Request info.に関しては，Pseudo requ.が 69.3%とやや高く，この授業もコミュニケーション志向が低い傾向にあると考えられる。

表 13 Class C における教師の発話:
Off task, Target language, Information Gap and Sustained Speech

					Information gap							
	Target language				Giving info.		Request info.				Sustained speech	
Off task	L1		L2		Predict.	Unpredict.	Pseudo requ.	Genuine requ.			Minimal	Sustained
0	52	(16.5%)	264	(83.5%)	13 (10.2%)	114 (89.8%)	104 (69.3%)	46 (30.7%)			272 (93.5%)	19 (6.5%)

表 14 は COLT Part B における学習者の発話の Off task, Target language, Information Gap and Sustained Speech に関する部分の集計である。

表 14 Class C における学習者の発話:
Discourse Initiation, Target language, Information Gap, Sustained Speech and Form restriction

					Information gap			
	Target language				Giving info.		Request info.	
Discourse Initiation	L1		L2		Predict.	Unpredict.	Pseudo requ.	Genuine requ.
0	3	(1.1%)	265	(98.9%)	212 (79.7%)	54 (20.3%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)

Sustained speech				Form restriction		
Ultra-minimal		Minimal		Sustained	Choral	Restricted	Un-restricted
38	(15.6%)	205	(84.0%)	1 (0.4%)	174 (64.7%)	91 (33.8%)	4 (1.5%)

学習者の発話は L2 が 98.9%と非常に高く，内容は教科書やロールプレイで使用するダイアログの音読も多いがロールプレイを行っており，そこでの

L2 使用も高くなっている。発話の長さはMinimal が 84.0%, Ultra-minimal が 15.6%と短い発話が多く，コミュニケーション志向が低いと考えられる。Giving info.に関しては，Predict.が 79.7%と高く，教師の Pseudo requ.に対する回答と教師の指示による音読が多くを占めていたが，Request info.は Genuine requ.のみで，5 ターンしか観測されなかった。Form restriction はこの授業においても学習者の音読の割合が高いため, Choral が 95.2%と高く, Unrestricted は観測されなかった。

表 15 は COLT Part B における教師・学習者の Incorporation of Student/Teacher Utterances に関する部分の集計である。

表 15　Class C における教師／学習者の発話

Teacher Verbal Interaction Incorporation of Student Utterances			Student Verbal Interaction Incorporation of Student/Teacher Utterances		
Form-related incorporations	4 (	10.8%)	Form-related incorporations	0 (	0.0%)
Correction	1 (	3.2%)			
Comment	2 (	6.5%)			
Repetition + Comment	1 (	3.2%)			
Message-related incorporations	33 (	89.2%)	Message-related incorporations	0 (	0.0%)
Repetition	7 (	22.6%)			
Comment	16 (	51.6%)			
Elaboration request	2 (	6.5%)			
Repetition + Comment	7 (	22.6%)			
Repetition + Elaboration reque:	1 (	3.2%)			

教師の発話において，Form に関する発話の取り込みが 10.8%，Message に関する発話の取り込みが 89.2%であり, Message を中心とした発話取り込みが多い傾向にあった。内容は Form に関するもので Correction が 1 ターン，Comment が 2 ターン，Repet. + Comment が 1 ターン見られただけである。Message に関するものは Comment が 51.6%と高く，学習者の発言の後で学習者を褒めていることに由来している。Repetition と Repet. + Comment がどちらも 22.7%とやや多く観察されている。Repetition + Elaboration request が 1 ターン観測されているが，回数が少なく，この点においてコミュニケーション志向はあまり高くない傾向にある。学習者による発話取り込みは観測されなかった。

4．4．Class Dの授業分析

表16はCOLT Part A における focus の分布の Participant Organization と Content に関する部分の集計である。Participant Organization はT⇔S/C が 71.8%と最も多く，教師が中心となった学習者とのインタラクションが多い傾向にある。Choral が 16.4%と他の３つの授業に比べ，少ない傾向にあった。この授業はコミュニケーション志向が高いとされている Group 活動が観測され，Group Same Task が 6.6%，Group Same Task + T⇔S/C が 5.2%であった。活動内容は通称 "Simons says" と呼ばれている動作を示す命令文を利用したゲームを学習者同士のグループで行っていた。

表16　Class D における focus の分布：Participant Organization, Content

	Participant Organization			Content		
Exclusive focus	T⇔S/C	1716 (	71.8%)	Procedure	408 (	17.1%)
	Choral	392 (	16.4%)	Form	394 (	16.5%)
	Group Same Task	158 (	6.6%)			
Primary focus	Group Same Task+T·	125 (	5.2%)	Procedure+Narrow	409 (	17.1%)
				Narrow+Form	232 (	9.7%)
				Form+Procedure	829 (	34.7%)
				Narrow+ Procedure	119 (	5.0%)

Content に関しては，言語形式が中心の Form + Procedure が 34.7%，Form が 16.5%であり，他の３つの授業と比較するとそれほど高くないが，意味内容中心の Narrow+ Procedure が 5.0%とそれほど高くない。この授業はグループ活動とその成果を発表させることが主たる目標とされており，活動をどのように行うかという説明に時間がかけられている。Procedure のほとんどが日本語で行われており，コミュニケーション志向が高いといえるかは議論の余地がある。

表17はCOLT Part A における focus の分布の Content Control, Student Modality, Materials に関する部分の集計である。Content Control は Teacher/Text が 77.9%であり，教師主導型の特徴を示しているが，Teacher/Text/Stud. も 22.1%見られた。Student Modality に関しては Listening + Speaking が最も高く，49.7%であり，Equal focus でも 2.7%であり，Exclusive focus で Listening が 29.6%であった。また，Speaking +

Listening も 6.3%あり，かなり Listening に焦点が当てられた授業である。Writing に関しては Writing + Listening で 11.7%あり，板書内容をノートに書き写す活動をさせていた。Materials は L2-NNS (Minimal) が 61.8%で，教科書の単語と本文を利用していた。Global score の数値は 6 点であり，Frölich et al. (1985) の Core French よりも高く，ESL の授業と Class C よりも低く，Class A・B よりもコミュニケーション志向が高いことを示している。

表 17　Class D における focus の分布：Content Control, Student Modality, Materials

	Content Control		Student Modality		Materials	
Exclusive focus	Teacher/Text	1769 (77.9%)	Listening	429 (29.6%)	L2-NNS(Minimal)	648 (61.8%)
	Teacher/Text/S	503 (22.1%)			Visual	401 (38.2%)
Primary focus	–	–	Listening+Speaking	720 (49.7%)	–	–
			Speaking+Listening	91 (6.3%)		
			Writing+Listening	169 (11.7%)		
Equal focus	–	–	Listening+Speaking	39 (2.7%)	–	–

表 18 は COLT Part B における教師の発話の Off task, Target language, Information Gap and Sustained Speech に関する部分の集計である。

表 18 Class D の授業における教師の発話:
Off task, Target language, Information Gap and Sustained Speech

	Target language				Information gap						Sustained speech			
					Giving info.				Request info.					
Off task	L1		L2		Predict.		Unpredict.		Pseudo requ.		Genuine requ.		Minimal		Sustained	
0	67	(38.3%)	108	(61.7%)	57	(44.9%)	70	(55.1%)	11	(30.6%)	25	(69.4%)	162	(95.9%)	7	(4.1%)

この教師の発話は L2 使用率が 61.%と比較的高い割合を示しており，コミュニケーション志向がやや高いと思われるが，L2 使用に関しては Minimal が 95.9%であり，1 回の発話が短い傾向にあり，コミュニケーション志向が低いと考えられる。Giving info.に関しては Unpredict.が 55.1%で，他の授業に比べ，少ない傾向にある。Request info.に関しては，Pseudo requ.が 30.6%と他の授業に比べて低い傾向にある。

表 19 は COLT Part B における学習者の発話の Off task, Target language, Information Gap and Sustained Speech に関する部分の集計で

ある。学習者の発話は L2 が 95.2%と非常に高く，発話の長さは Minimal が 65.1%, Ultra-minimal が 34.9%と短い発話が多く，コミュニケーション志向が低いと考えられる。Giving info.に関しては, Predict.が 97.0%と高く，教師の指示による単語の音読が多くを占めていた。Request info.は Genuine requ.がすべてであり，28 ターン観測された。Form restriction はこの授業においても Choral が 95.2%と高く，Unrestricted は観測されなかった。

表 19　Class D の授業における学習者の発話:
Discourse Initiation, Target language, Information Gap,　Sustained Speech and Form restriction

			Information gap			
	Target language		Giving info.		Request info.	
Discourse Initiation	L1	L2	Predict.	Unpredict.	Pseudo requ.	Genuine requ.
0	6 (4.8%)	120 (95.2%)	97 (97.0%)	3 (3.0%)	0 (0.0%)	28 (100.0%)

Sustained speech			Form restriction		
Ultra-minimal	Minimal	Sustained	Choral	Restricted	Un-restricted
44 (34.9%)	82 (65.1%)	0 (0.0%)	120 (95.2%)	6 (4.8%)	0 (0.0%)

表 20 は COLT Part B における教師・学習者の Incorporation of Student/Teacher Utterances に関する部分の集計である。

表 20　Class D における教師／学習者の発話:

Teacher Verbal Interaction Incorporation of Student Utterances		Student Verbal Interaction Incorporation of Student/Teacher Utterances	
Form-related incorporations	2 (15.4%)	Form-related incorporations	0 (0.0%)
Comment	1 (3.2%)		
Repet+comment	1 (3.2%)		
Message-related incorporations	11 (84.6%)	Message-related incorporations	0 (0.0%)
Comment	4 (12.9%)		
Repet+comment	6 (19.4%)		
Paraphrase+Comment	1 (3.2%)		

教師の発話において，Form に関する発話の取り込みが 2 ターンのみ(15.4%)であり，Message に関する発話の取り込みが 11 ターン(84.6%)であり，発話取り込み自体が少ない傾向にあった。内容は Form に関するもので Comment, Repet. + Comment がそれぞれ 1 ターンずつ見られた。Message

に関するものはRepet. + Commentが19.4%，Commentが12.9%であり，内容は学習者を褒めるコメントが多く見られた。

5．考察

COLTによる分析の結果，各授業の特徴が明らかになり，異なるコミュニケーション志向を有していることがわかった。この結果を利用し，どのように授業を改善することでコミュニケーション志向の高い授業になるのかを考察し，授業の改善方法を提案する。

5．1．Class Aの授業の改善点

この授業はGroup活動がなく，コミュニケーション志向が低い傾向が見られる。そこで，教師と学習者のみのインタラクションだけで授業を進めるのではなく，Group活動を取り入れることを提案する。杉田 (2002)において，教師と学習者とのインタラクションはコミュニケーション志向を高めるとしているが，多くは教師と指名された1名の学習者とのインタラクションであり，それ以外の学習者はそのやり取りを聞いているにすぎない。しかし，Group活動は学習者同士のインタラクションの機会ができ，コミュニケーション志向を高めることができる。次に，Contentの項目において，文法事項や語彙についての発問と回答，教科書の音読などFormに焦点を当てていることが多い。この点は教科書や教材の意味内容について多くの時間を配当することで，コミュニケーション志向を高めることができる。また，Procedureの多くが日本語で行われていることから，学習者も日本語で答えることが予測される。教師がProcedureでの英語使用を増やすことで，学習者の英語使用量を増やすことも可能である。次に，Content Controlについて，学習者による話題制御が見られず，コミュニケーション志向が低い傾向にあり，改善が必要である。

Target languageの使用に関しては，日本語使用率が非常に高く，英語を使用する場面を増やすべきである。この授業では教師による Classroom English がほとんど用いられておらず，日本語使用率が多い原因となっている。学習者の発話については英語使用が教師の発話に比べ非常に高いが，そ

の多くが教科書や単語の音読である。また，Form restriction も Choral が多いことから，学習者による真正の発話が少ないため，コミュニケーション志向が低い傾向にある。これらを解消するために，音読の回数を減らし，学習者同士のインタラクションを増やすことが必要ではないか。

教師の発話摂取に関しては，Repetition や Comment が見られ，相槌や褒めるなど，学習者の発話を促進する作用はあるが，１回の発話接取のみでインタラクションが終了しており，発話の内容を深めていない。青木他 (2008) では Sequential analysis を行い，会話内容を発展させている発話の場合として，教師などが質問などによって会話を主導し，(Initiation)，それに対して学習者が応答し (Response)，教師がコメントを加える (Follow-up)，いわゆる IRF のパターンの後に, Clarification request や Elaboration request を加えたパターンが会話内容を発展させていると指摘している。そこで，学習者の発話の後に, Clarification request や Elaboration request などを行うことで，インタラクションをさらに続けることができ，コミュニケーション志向を高めることが可能になるのではないか。

５．２．Class Ｂの授業の改善点

この授業は，Group 活動が行われていないので，この活動を行うことでコミュニケーション志向を高めることができる。Content に関しては言語形式が多い点, Procedure が日本語で行われている点などの改善が必要であろう。

Content Control に関しても Teacher/Text だけであり，学習者が制御できる活動を取り入れるべきであろう。Student Modality に関しては Writing の活動があるが，黒板の内容をノートに書かせるだけであり，授業で扱った内容について，英語を書かせる活動も取り入れるべきではないか。また，Reading を扱っていない点についても改善が必要である。教材に関しては Visual 教材を多数使用していたほか，実物教材も使用しており，コミュニケーション活動を活性化させる要因となるのではないか。

Target language の使用に関しては，英語使用の方が若干多いが，それほど多いとは言えない。これは Classroom English を使用していないことが原因であり，この点の改善により，英語使用率を高めることが可能である。

学習者の発話については，英語使用が教師の発話に比べ非常に高く，短いものが多い。Request info.ではGenuine requ.が多く，学習者による教師への真正要求が見られ，コミュニケーション志向が高い傾向を示しており，評価できる。また，Form restrictionに関してはClass Aに比べるとRestrictedが多くなっているが，学習者の自由な発言を促すことにより，Unrestrictedを増やすことができ，コミュニケーション志向を高めることも可能である。

教師の発話摂取に関しては，意味内容への応答の方が多く，コミュニケーション志向が高いと評価できる。Clarification requestは学習者の発話内容を深めることができ，更なるインタラクションを生み出すことができ，コミュニケーション志向を高めることが可能である。

5．3．Class Cの授業の改善点

この授業はChoral + T⇔S/Cが多く，T⇔S/Cが他の授業に比較して低い傾向にある。これは教科書や単語の音読が多く行われていることが原因であり，学習者同士のインタラクションの場面を増やすことと，Group活動を取り入れることが求められるのではないか。Contentに関しては言語形式が多い点はClass A・Bと共通しているが，Procedureのほとんどが英語で行われているため，コミュニケーション志向が高いと評価できる。

Content Controlは学習者により内容を決定できる場面があり，評価できるが，その割合を増やすことで，更にコミュニケーション志向を高めることが可能であろう。Student Modalityに関してはListeningとSpeakingのみ扱われており，Reading とWritingを取り入れる改善が望まれる。

Target languageの使用に関しては，L2である英語の使用率が高いが，短い発話が多く，もう少し長めの発話を行うことで，コミュニケーション志向を高めることができる。Give info.に関してはClass A・Bと同じ傾向にあるが，Request info.に関して，Genuine requ.が他の授業よりも多く使用されており，評価できるが，さらに使用頻度を上げることが期待される。

学習者の発話については，英語使用が非常に高く，短いものが多いものの，発話量が多く，音読以外の場面での英語使用も多く，評価できる。また，Form restrictionに関してはRestrictedがClass A・Bよりも多くなっているが，

Unrestricted が少なく，さらに多くなるよう授業の改善が必要であろう。

教師の発話摂取に関しては，意味内容への応答が多く，コミュニケーション志向が高いと評価できる。内容には Comment や Repetition などが見られるが，Message に関する取り込みの中に，Elaboration request が 2 回と Repetition + Elaboration request が 1 回観測されている。これらの項目は学習者の発話内容を深めることができ，コミュニケーション志向を高めることが可能である。これらの発話摂取をさらに増やすことが期待される。

5．4．Class D の授業の改善点

この授業は4つの授業の中で唯一 Group 活動が観測され，コミュニケーション志向が高いと評価される。Content に関しては Procedure に関わる発話が多く，Group 活動の説明がほとんどを占めている。この説明はほぼ日本語で行われており，英語で行うことでコミュニケーション志向を高めることが可能ではないか。意味内容の扱いが少なく，Group 活動で使用する言語形式の説明や練習に多くの時間が当てられていた。

Content Control は学習者により内容を決定できる場面があり，評価できるが，その割合を増やすことが必要である。Student Modality に関しては Listening と Speaking が中心であり，Reading が扱われておらず，バランスを欠いた授業になっている。また，Writing に関しては，黒板の内容を学習者に書かせる活動のみであり，改善が望まれる。

Target language の使用に関しては，L2 である英語の使用率が比較的高いが，短い発話が多く，改善が必要であろう。また，Request info.に関して，Genuine requ.が Class C 同様に授業よりも多く使用されており，評価できるが，さらに使用頻度を上げることが期待される。

学習者の発話については，英語使用が教師の発話に比べ非常に高く，短いものが多い。Give info.に関しては他の授業と同じ傾向だが，Request info. は Genuine requ.が多く，学習者からの質問がよく見られた。

教師の発話摂取に関しては，意味内容への応答の方が多く，コミュニケーション志向が高いと評価できる。内容は Comment や Repetition などが見られるが，学習者の発話内容を深める発話摂取は観測されず，改善が望まれる。

6．結論

本研究では，コミュニケーションを志向した授業への改善方法を提案するために，教師を目指す大学生が行った模擬授業について，COLT を用いて分析を行うことにより，以下のことが明らかになった。

1）COLT による分析により，授業の特徴を明らかにすることができ，どのような点でコミュニケーションを志向しているかを具体的に明らかにすることができた。

2）COLT による分析により，授業者に対して，どのような点がコミュニケーション志向が低く，改善が必要かを明らかにすることができた。

このような分析を行うことにより，コミュニケーションを志向した授業に関して教師間の認識を一致させることが可能になるのではないか。また，授業の改善点を客観的に明らかにすることができ，授業者に対する助言の根拠として使用することも可能である。今後は教育実習での授業や，中学校・高等学校の教師が行った授業についての分析も行っていきたい。

本研究は，2008年7月5日に行われた，大学英語教育学会北海道支部2008年度大会において，口頭発表したものを修正・加筆したものである。

引用文献

Frölich,M., Spada,N. and Allen,P. (1985). Differences in the Communicative Orientation of L2 Classroom. *TESOL Quartely,19*, No.1, 27-57.

Spada,N. and Frölich,M.(1995). *COLT Observation Scheme*. Sydney: National Center for English Language Teaching and Research, Macquarie University.

青木千加子・石塚博規・横山吉樹・酒井優子・河合靖.(2008). 「COLT PartB によるコミュニケーションを指向した英語プログラムの授業分析：Communicative Classroom Research Using COLT PartB」 *Research Bulletin of English Teaching*, 5, 1-25.

石塚博規・横山吉樹・平田洋子・青木千加子・伊藤優子・河合靖・高井収・新井良夫. (2005). 「COLT PartA によるコミュニケーションを指向した英語プログラムの授業分析」 『JACET 北海道支部紀要』, 第2号, 41-63.

笠島準一・浅野博・下村勇三郎・牧野勤・池田雅雄他 .(2007). 『NEW HORIZON English Course 1』 東京: 東京書籍.

河合靖・酒井優子・横山吉樹・石塚博規・青木千加子. (2007). 「COLT PartB による観察方法とその問題点」『メディア・コミュニケーション研究』, 第53号, 99-113.

杉田由仁.(2002). 「コミュニケーションを視点とした英語の授業分析：授業観察法(COLT)の実用可能性」 『山梨大学教育人間科学部紀要』, 第3巻(2), 79-86.

文部科学省. (2008). 『高等学校学習指導要領 ― 平成21年3月告示 ― 』 東京: 文部科学省.

米山朝二・大湊佳宏・須田拓朗・前野春樹・吉田紀夫. (2003).「言語習得理論に基づく授業の改善―ＣＯＬＴを用いた授業分析―」 『平成13－14 年文部科学省委託研究 教職家庭における教育内容・方法の開発研究事業第2年次研究報告書, 教育学部人間科学部教科専門と教科教育との内容的修士課程における教科専門と教科指導との内容的な連携協力のあり方―実践的指導力の養成・向上を目指して―』. 新潟大学な連携協力構想研究会（代表研究者 常木正則）, 69-103.